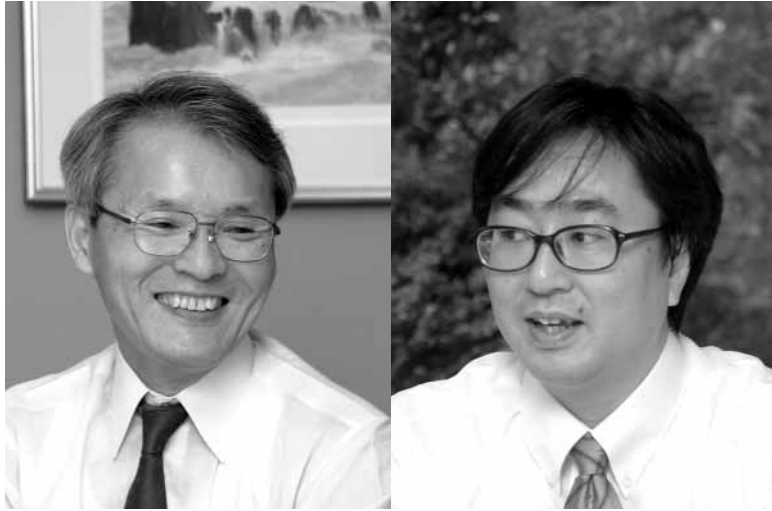


特 集

# 家族とストレス



東京都立大学  
人文学部教授

**石原 邦雄**

明治学院大学  
社会学部教授

**野沢 慎司**

対談

# 家族とストレス

## ストレスという視点から家族を考える

**石原** 今回の対談のテーマは「家族とストレス」ですが、まず、ストレスとは何かというところから始めましょう。

元々、ストレスとはある物体に力が加えられて内側から反発する時に生じた物体の歪みを指す物理学の概念です。この概念が人間の心と体の結びつきを理解するのに大変有効であったことから、キャノンやセリエといった人たちが生理学にストレス論を持ち込みました。人間は外からの刺激がある状況に対して適応していきますが、その適応の仕方の中にも「問題」となる状況があるわけです。そこで、病理というよりはむしろ生理であり、日常の中での生き方の歪みや難しさを捉えることが大事だということになりました。

そして、ストレスは医学の領域でも重視されるようになりました。従来は、細菌などの病原体があるから病理が発生するのだというように、原因と結果を切り離して分析する見方がありましたが、ストレス概念の導入は、原因と結果を総合し直して、日常的に生きている状態の中でのひずみとか歪みのようなものを捉えようという新しいものの見方のきっかけとなりました。また、心と身体の連関性も重視されるきっかけともなっています。

心理学やほかの領域でも、人間の問題を考えるときに単なる病理としてではなく、主体と環境の関係のありようとしてのストレスを考えることが今日的な捉え方としてフィットすることが、ストレスという概念が流行っている理由だと思います。

現在では、ストレスとは、外圧によって生じる個人の精神心理的、あるいは身体的に不調な状況として理解されています。したがって、一般的に家族のストレスと言えば、家族生活をしている中で個人にかかるストレスだと言えるでしょう。他方、家族社会学における家族ストレス論という研究領域は、集団としての家族ストレスを受けて

いる状態を捉え、家族組織がそれにどう対応しているかを理解しようとするものです。ですから、家族ストレスについての研究は、個体としての人間の心理や生理を理解しようとする研究とは、認識の水準が少し違うところから始まっています。つまり、家族とストレスとの関係を考えるときには、個人に注目する場合と集団としての家族に注目する場合とがあるわけですが、とりあえずは個人のレベルで考えたらいいでしょう。

**野沢** ストレスという概念を個人についてだけではなく、家族、つまり複数の人間が集まってできあがった単位にもある程度応用できるとする見方が出てきたわけですが、さらに最近では、家族研究においてもストレスを個人単位で捉えようとする見方がふたたび出てきています。それぞれ違ったものを説明する視点なのだから、いろいろとあってもよいということになるのでしょうか。

## 変容する家族とその捉え方

**石原** そうですね。家族とストレスについて考えるにあたってストレスの話から入りましたが、次に家族の側から話をしてみたいと思います。

家族のあり方も、そして家族の捉え方も時代とともに変わってきました。もともと、家族とは、制度や仕組みとして文化的・社会的に決まったあり方をしていると理解されてきました。そして、このような理解に基づき、家族がどのように変わってきたかが論じられました。その上で、20世紀の初頭以後、個別の家族の働きを視野に入れるようになって、個別の学問領域としての家族の社会学が発達しました。

そこでは、家族とは1つの人間の集まり（集団）で、外部との境界が明確であるようなまとまり（クローズドシステム）とみるところから出発しています。家族とストレスとの関係でいいますと、家族ストレス論を提唱したルーベン・ヒルは、不

況、失業、災害、戦争への出征などの状況下で、家族がどういう困難に陥り、どのように立ち直るかについての研究を通して、集団、クローズドシステムとしての家族のあり方を考察しました。つまり、集団としての家族のストレス状況を認識することが、家族ストレス論の始まりでした。

ところが、家族はクローズドシステムではなく、外部に対し開かれていて交渉をしている集団、すなわちセミクローズドシステムあるいはオープンシステムであるとする見方が出てきました。現在では、家族の個人化や多様化が進みましたので、家族を一つの観察や分析の単位であるとの前提を立ててしまうと捉えきれないことも出てくるようになりました。個人を基礎としつつ、家族関係の広がりやまとまりを捉え直さざるを得ない問題が多く出て来ているのが家族研究の現状です。

したがって、ストレスを通して家族の問題を捉えようとする、集団としての家族が置かれているストレスに留まらず、家族の中にいる個人がどのように個人としてストレスを受け止めたり、解消したりするかを把握するほうが捉えやすく、また今日的な新しい問題状況に適合している面は多いと思います。

ストレスを通してみる家族のあり方については、さらに理論的にいうと、いま申し上げたシステムあるいは集団のレベル、個人のレベルに加えて、ダイアドとよばれる二者関係——たとえば夫婦関係や母子関係のレベル——、以上3つのレベルで議論できるでしょう。

**野沢** この点は、家族の定義の問題とも関わりますが、私はストレスを個人の視点だけに還元してしまうのも不十分な気がしていて、システムという視点の可能性も感じています。ただし、家族だけをシステムとみる必要はなく、家族の境界を越えたり、横切ったりするネットワークの一部が形作るシステムもあると思います。

たとえば、私が最近研究テーマとしている子連

れ再婚家族つまりステップファミリー (stepfamily)<sup>1)</sup> を例にとると、離婚した元夫妻は互いに同じ「家族」に属していないと思うかもしれないけれど、ひとつの子育てシステムの構成メンバーである場合があります。アメリカではかなり以前から、そして最近の日本でも、離婚後も親と一緒に暮らしていない子どもと定期的に交流することが珍しくなくなってきました。元の配偶者のどちらかが再婚していれば、もう一方の元配偶者である血縁の親と、子どもと一緒に暮らしている継親 (step parent) の双方が子育てに関わることになります。この子育てのシステムを「家族」と呼ぶかどうかは別として、このようなあり方を複数の世帯にまたがって機能を果たしている家族的なネットワークであり、ひとつのシステムであるとはできるでしょう。家族が再編されても消えないシステムの部分があり、個人が感じるストレスをそれとの関連でみる必要があるのではないかと思います。

**石原** そうでしょうね。家族の定義をどう考え直していくかは、いまだに大きな問題です。老人介護では、家族の側との援助者側とのシステム間の調整が大事だといった指摘がなされています。子育てについても、そのシステムを一つのシステムと考えるのか、それとも複数のシステムの間複合的關係と考えるのか。システム論は、どちらにも適用できるところが柔軟ですが、逆にそれでもまだ「家族」という言葉を使い続けるとすると、何をもって「家族」と言うのか、「家族」を想定することの意義は何なのかが問われます。そこがもっとも難しい点ではないでしょうか。

### 家族研究に求められる姿勢とは

**野沢** システムにさまざまな機能——このような言い方が適切かどうかわかりませんが——があるとすると、それらをすべて包括するシステムとし

ての家族は成立しにくくなっていると言えるでしょう。高齢者介護にかかわる複数のシステムの一つに家族がありますが、家族も境界がはっきりとしているシステムとはいいいがたい面があります。家族が包括的なシステムとして成立していなくても、個別機能のレベルで必要なシステムがあるのかもしれない。

ステップファミリーの例をみますと、継親子関係において子育てのモデルが存在しない中で、家族なのか家族ではないのかといったことにこだわらずに、役割分担を決めて子育てにかかわっていかざるを得ないことも多いと感じました。

おそらく社会の多くの人たちは、なんらかの「集団あるいはシステムとしての家族」の存在を自明のものとして暮らしているのでしょうか、そうではない人も結構いる状態になっていると思います。

**石原** いや、家計経済研究所による「現代核家族調査」の報告書（財団法人家計経済研究所編 2000）を読むと、むしろそうではないですね。多くはそう変わっていないのが実状ではないかと思えます。ただ、だからといって多数派が正常で、少数派は異常で逸脱している存在ということになってはいけません。野沢先生が報告書に書いていらっしゃるように（野沢 2004）、少数派の人が、たとえ差別をうけなくなっても、多数派と違うことがストレスの原因になることはありえます。ですから、研究をすすめるにあたっては、多数派の基盤を充分におさえた上で、多数派と少数派との関係をみるのが重要です。すべてのことをひとつにまとめることはちょっと難しいので、それぞれの事象を丁寧につかまえる努力をするしかないと私は考えています。

## 家族ストレス論の有効性と可能性 ——家族戦略論との接合と実践への応用

**野沢** すこし話は変わりますが、石原先生は放送

大学の教科書（石原編 2004a）の中で、家族戦略論とストレス論が接合することで新たな可能性が開かれると書かれています、具体的にはどういうことでしょうか。

**石原** 「家族戦略」という概念に関して、社会学では、ブルデューの言うハビトゥス、つまり個人的な意図を超えて作り上げられ、それぞれの社会階層や文化なり地域に応じた問題への対処の仕方があるとする見方が影響力をもっています。たとえば、低開発国や農民社会では、結婚や相続など家族にまつわるそれぞれの課題ごとに対応方法のセットがあり、それを発動しているというものです。「生存戦略」といった用語も使われています（石原編 2004b）。

また、個人に焦点を当てる場合には、精神分析にはディフェンスメカニズム——外部からの脅威にさらされたときに、自己を防衛・維持するために人間がとるさまざまな行動様式・反応様式——という見方があります。しかし、これはストレスへの対応を受動的にみる見方だといえます。

こうした見方に対して、家族ストレス論は、家族が創造性や能動性を発揮して「問題」状況に対応することを強調しようとするので、その対処を対処戦略（コーピング・ストラテジー）などというわけです。ここに、家族戦略論と家族ストレス論の接点があるのではないかと思います。なお、この対処戦略という言葉は、心理学でも使われている個人レベルのコーピング＝対処という言葉に、中期・長期的なある目標に向けた意図的な対応方法のセットを意味するストラテジー＝戦略（または方略）という言葉をつなげてきたものです。

**野沢** 災害や病気などのストレス経験に対して長期的な視野でそれを乗り越えていく戦略を立てることなど、能動的な面を強調する見方ですね。

では、家族ストレス論の研究成果を臨床に応用し、実際の戦略を立てるのに役立てることは可能

でしょうか。先生はセルフヘルプグループ<sup>2)</sup>の重要性をお書きになっていますが、研究者も参加して、個人が努力して生み出す問題への対処方法や地域に蓄積している経験や知恵を集めたり学んだりして、個々人の戦略に資するようにする可能性についてはどのようにお考えですか。

**石原** もちろんあると思いたいのですが、あまり実践できてはいません。ひとつの方向性としては、研究者が、ソーシャルワーカーや医師など専門家として現場と接している人々や、セルフヘルプグループやNPOのような当事者の組織と協力しながら、共同作業に参加したり、知恵をつくり出したりするかたちがあるでしょう。

**野沢** そうした試みにおいて、社会学者の貢献が期待されているところもありますね。

**石原** 社会学者への期待としては、まず、政策レベルでは、教育という形での貢献が求められています。また、もっと実践的で臨床的なレベルでは、現状診断の枠組みや方法の開発がありますが、それにとどまらず、「問題」の解決に役立つプログラムを作ることが求められています。まだ組織的に取り組む段階には達していませんが、可能性は広いと思います。現在、少なくともアメリカなどではそういう実践が具体化されており、家族教育の分野における専門家なり専門技術の育成、看護やソーシャルワークの現場における技術論などが、論じられています。

**野沢** 2001年にステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン (Stepfamily Association of Japan ; SAJ)<sup>3)</sup> が発足したとき、アメリカで25年の歴史を持つ全米ステップファミリー協会 (Stepfamily Association of America ; SAA) の会長で、研究者でもあり、実践家でもあるマージョリー・エンゲルさんを招いて講演会を行ったことがありました。そのときに、SAAにおける社会学者の貢献はどれくらいあるかとお尋ねしたところ、あまり大きくはないという答えでしたので、

ちょっとがっかりしたことがありました (笑)。

**石原** そうでしょうか？

**野沢** おそらく心理学者や臨床家に比べて、という意味だったと思いますが、実際にはSAAの委員会に家族社会学者が参加して活動していますので、日本の状況に比べると、社会学者の貢献は少なくないと思います。何が役に立つのかは難しい問題ですから、研究者が実践に役立つことばかりを目指す必要はありませんが、もう少し積極的になってもいいと思っています。私自身は、最近ではステップファミリーの研究に家族ストレス論をどう応用できるか、強い関心があります。

石原先生のこれまでのご研究で、実践への貢献という点で、なんらかの困難に直面している家族なり個人に見通しを与えられる、具体的な戦略を提供する議論はありますか。

**石原** たとえば、メンタルヘルスの領域であれば、アルコール依存症のセルフヘルプグループがあります。戦略とまではいえなくても、患者が立ち直っていくためのプロセスにおいて何が必要なか経験を含めて整理が進んでいます。

また、精神障害者に関しては、再発防止のため、患者さんが家族など周囲の人とうまくコミュニケーションをとれるようにするための教育プログラムの開発などが進められています。

しかし、戦略を立てるという段階にまで達し、いろいろな「問題」に適用できる議論をつくるとなるとそう簡単ではないでしょう。当面はそれぞれの「問題」領域の中で具体的にどういうやり方で問題を解決できるかをずっと丁寧にみながら、同時に戦略を抽出できるような研究を積み重ねていく必要があるでしょう。

## 家族の中で誰がストレスを経験するのか ——ストレスのジェンダー差

**野沢** それでは、職業生活や家庭生活など日常的

な生活のなかで生じるストレスについてはどうでしょう。石原先生は2年前に『家族と職業』という本（石原編 2002）を出されていますね。

**石原** 職業生活と家庭生活の両立や緊張関係の研究は、家族研究の中で「ワーク・アンド・ファミリー」と呼ばれている領域ですが、現代生活の大きなポイントの一つです。アメリカなどでは女性だけではなく男性（夫）も含めた働き方と家庭生活との関係が問題になりますが、日本では女性にとってのみの問題とされることが多いのが実状です。職業生活と家庭生活とのバランスのとり方をどう把握するかが研究の関心になっており、ストレス論との関係では、職業生活で感じているストレスがどのように家庭生活に持ち越されるのか、逆に、夫婦関係がどのように仕事に影響するかというスピルオーバー（流出）仮説の検証などがなされています。

**野沢** 家族のシステム全体としてストレスを経験してそれに適応するだけではなく、その中で誰かがストレスをおしつけたり、おしつけられたりすることで、家族のシステム自体がストレスを生み出すのではないかという見方があります。そうすると、家族の中でストレスを経験するのは誰なのでしょう。男性より女性、夫より妻のほうが、ストレスが高いのでしょうか。

**石原** 女性がストレスを抱えているのは事実で、アメリカも同じです。結婚している場合、男性のほうが結婚満足度は高い。つまり、男性のほうが、結婚からの利益を享受しているといえます。

**野沢** このジェンダーによる違いはストレスを考えるにあたって重要ですね。もちろん、あくまでも平均値で見れば男性が得をしているという話ですから、個々の事例は多種多様でしょう。最近、社会や家族のあり方が変化して男性も家族役割を担うようになったため、男性も職業生活と家庭生活の間での葛藤や緊張、つまりストレスを経験するようになってきたのではないのでしょうか。ス

トレスが低減するというよりむしろ、新しい形のストレスが現れてきているようです。

**石原** 女性が構造的に弱い立場に置かれていると考えるならば、家族の中では女性にしわ寄せがきていると言えるかもしれませんが、一概にはいえません。性別役割分業という文化的あるいはイデオロギー的な仕組みがどれくらい受容され、望まれているかが重要です。専業主婦であることを納得している人にとっては、それはストレスにはならないという家計経済研究所の調査結果もあります（財団法人家計経済研究所編 2000）。

**野沢** 以前に石原先生と共同研究させていただいた調布調査でも、同様の結果が得られていましたね（石原編 2001）。

**石原** つまり、どのような価値観や評価基準に基づいてみずからの状況を判断するかによってストレスが生じたり生じなかったりするわけです。この価値や文化の問題は、ストレスのジェンダー差を考えるにあたって重要です。

## ストレスの世代差と家族の将来像

**野沢** 子どもを中心に考えると、誰かが単独で子どもを世話しなくてはならないため、女性がストレスを背負いがちだったことがあると思います。こういったジェンダーによる違いの他に、世代による違いもありますね。

放送大学の教科書（石原編 2004a）の第15章で紹介されているエルカインドの「ポストモダン家族の展望」は非常に面白く、これを取り上げた私の授業でも議論になりました。エルカインドを基に石原先生がお作りになった図表にそって家族の変化をみていくと、近代は子どもが家族の中心であり、脱近代1（現代）は大人（親）中心に振れた結果バランスが崩れているから、脱近代2（将来）ではバランスをとることが望ましい家族のあり方ということでしょうか。この展望をスト

レスとの関係で考えると、親、とくに母親がストレスを抱えていたけれども、父親もだんだんストレスを分かち合うことが必要とされるようになったといえますが、脱近代では次第に子どものほうにストレスが移行していると言うのですね。離婚・再婚の増加について言えば、それは親の事情ということになりますから、ストレスが子どものほうに行きがちになるのかもしれませんが。ただし、それは結局親のストレスにもなるのですが。

**石原** エルカインドが強調するのは、現代的な男女の平等を訴える、自立した大人の女性の話です。そうするとさらに、自立できない人たち、子どもや高齢者はどうするのかといった問題が出てきます。

ジェンダー差に話を戻すと、女性は家族の基本的な機能であるケアに向いているからケアをすべきだというように社会化されるので、他者に気配りをする。そうすると、ケアの対象者の状態に自分も影響されてストレスを感じるとするケアコスト仮説という考えがありますね。ケアは誰がどう担うのか、社会的におこなうべきか、家族が担うべきか、これは家族論の重要な論点でしょう。

**野沢** ストレスの分かち合いとは、ケアのコストを女性だけではなくて男性にも、そしてある意味では自立の促進を目指して子どもにも分散させることと言えるでしょう。エルカインドが主張するようなポストモダンの家族とは、このような分散の方向について述べていると思います。日本も多かれ少なかれ、そういう傾向が出てきていると思います。

**石原** マスコミは新しい「問題」を強調しますし、賀茂美則さんも日本は20年遅れでアメリカを追いかけているとおっしゃっていますが（賀茂 2003）、本当にそうかどうか疑問に思っています。

しかし、分散の方向がないとはいえないことは確かです。日本の家族がどのようなコースをたどろうとしているか、まだ見通せてはいません。このような問題に取り組んでいるのが家族変動論と呼ばれる領域ですが、家族についての大枠的な状

況認識と個別の家族のあり方やサポートのあり方をどのように関連づけて考えられるか。こういう問題提起は社会学の得意とするところであるでしょう。ただ、先ほど挙げたような技術論の次元まで発展させることはまだ得意ではないと感じています。

## 危機的状況にある家族のストレスと その対処

**野沢** 技術論とシステムの見方について再び考えると、家族であっても誰がケアのコストを担うかで、潜在的に利害が対立しうる現実に直面します。このことが、外部からサポートすることの難しさに関係しています。ステップファミリーでも、1つの団体が継親と継子に同時にサポートを提供できるのか。利害が対立するメンバーを別個にサポートする複数の団体が必要なのか。そう考えると、一貫したプログラムの開発も決して簡単ではありません。

家族をシステムとして支えていくことが必要な側面がありながら、どこかそれだけでおしきってはいけないことも現実なのではないでしょうか。

**石原** 私が多少関わった精神障害者のケースも、患者さんの家族の会はセルフヘルプグループのようになっており、医療、社会的な制度やサポートの改善に関して随分と影響力を持ちました。しかし、当事者として発言をしたい患者さんの場合には、家族と利害が対立することがあります。また、患者さんのきょうだいは、親とは別の悩みを抱えていることもあります。

ステップファミリーの話であれ、他の「問題」を抱えている家族であれ、その中の個々人の利害が一致するとは限りませんから、解決策は一つだけではないでしょう。どの立場に立つかによってものの見方が変わってくることを、どれだけ自覚しているか、それが厳しく問われることになります。

## 社会的ネットワークのあり方と ストレスとの関係

**石原** 野沢先生は社会的ネットワークをご専門に研究なさっていますが、ネットワークとストレスはどのような関係にあるのでしょうか。

**野沢** ひとつには、サポートシステムの政策的な側面との関連です。具体的に言うと、当事者組織、友人、家族、および専門家、自治体などが提供するサポートの効果を検討する場合に、ネットワークの構造が関連していると思います。

これら相互の関係について、一般的には、皆が連携することが大事であって、相互に孤立していることは良くないと考えられています。たとえば、児童虐待など社会的に注目を集めるような事件があると、学校、児童相談所、親族や近所の人たち、すべてが連携して、ある意味で包囲網とも言える強く連帯したコミュニティがあれば悲劇は防げたのではないと言われることが多いです。

そのような連帯が実現可能かどうかの問題もありますが、連帯がつねに良い効果をもたらすかどうかは疑問です。逆にネットワークのなかに抜け道のような回路があることが良い効果をもたらすこともあるのです。家族の問題で悩んでいても、親族や近隣には、悩みを理解してくれる人がいないし、話せない。そのような場合に、セルフヘルプグループのような愚痴をいっても家族に筒抜けにならない場に参加して互いの悩みを話せれば、ストレスが解消されることがあるでしょう。

再度ステップファミリーの例を出すと、一見お父さんとお母さんがそろっている「普通」の家族に見えますので、同じような経験をしている人を探すことは、かなり難しいという状況があります。でも、最近ではインターネットが普及したので、居住地域を越えて、類似の経験をもつ相手とのネットワークを形成しやすくなりました。

日常生活では連帯的なネットワークが重要です

が、そこで生まれるストレスを解消するためには、網の目を緻密にするだけではなく、網に「すき間」や「裂け目」を意図的に設けて、完全に閉じた1つのかたまりにならないようにすることが、むしろ良い効果を生むのではないのでしょうか。

さらにさきほどの戦略論との関係で言うと、たとえばよりよい職業キャリアを目指したり、自分の能力を高めようとしたりする場合にも、閉ざされたネットワークの中に埋めこまれているより、さまざまな異質な世界への通路が開けていくようなネットワークが役に立つという議論もあります。特に政策としてストレス状況にある家族をサポートする上では、このような視点を応用する余地がありそうです。

家族の変動に関して言えば、家族の個人化や多様化に伴い、いろいろなタイプの家族が生まれてきましたが、必ずしもストレスが少なくなるとはいえず、むしろ新たなストレス状況を生み出したりもします。それに対処するためには、身近な人だけではなく、離れた世界にいて、似たような経験をし、同じような状況にある人とネットワークを積極的に作ることが重要になっています。

**石原** ストレスに満ちた状況から脱却するためのシステムをつくること自体が援助であったり、あるいは対処方略であったりするので、それを生活のパターンとして用意しておくことが、ストレス予防になるとも言えるでしょう。

ただ、ネットワークと言うとき、それは心理的なサポートを提供するサポートネットワークなのか、社会関係の広がりという意味する社会的ネットワークあるいはパーソナルネットワークなのか、それとも両者の中間的な形態を指すのでしょうか。もし、社会関係の広がりとしてのネットワークを指す場合には、ネットワークの構造を把握する前に、まず、1つ1つのダイアドの関係をもう少しきちんと理解した上で、ダイアドと他のダイアドとの関係、さらに、その広がりとしてのネットワ



ークを考えるステップをとるほうが明快で有用なのではないでしょうか、それとも最初から広がりとしてのネットワークありきなのでしょうか。

**野沢** 1つ1つの関係の質をもっときちんと捉える必要があるということですね。

**石原** そうです。たとえば友人ネットワークを調べる場合、どのようなタイプの友人が何人いるかで済ませてしまう傾向もあるようで、それでもデータを分析するとネットワークとなんらかの事象との間に相関があるという結果が得られるようですが、ネットワーク中の親友の存在など、もう少しリアリティーのある説明が可能になるようなネットワークの捉え方がないのでしょうか。家族もネットワークであるとみるならば、夫婦関係や親子関係など、1つ1つのダイアドの関係や役割関係のありようを踏まえてから展開してもらいたいと期待しています。

**野沢** その通りですね。1つ1つの関係についての情報が少ないと、理解が不十分になります。事例研究をすれば、まず夫婦関係、さらに父子関係というように1対1の関係をたどることができそうです。そして絆の強弱、絆が強いとはどのようなことかとか、対立関係や関係の歴史なども含めてみていかないといけませんね。分析上の技術的な難しさはありますけれども。

## ステップファミリーに見る家族のゆくえ

**石原** さらにステップファミリーの例にあるように、必ずしも家族関係のつながりを持っていない人が参入する子育てのシステムなどをもう少し詳細に解き明かして、戦略なり技術を論じる人が是非出てきてほしいですね。

**野沢** ステップファミリーは、家族とはシステムなのか集団なのか、どちらでもないのか、あるいは家族をネットワークとみる見方がどう役立つかといった問題が当事者につきつけられている、も

っとも典型的な例だと思います。つまり、この子と自分がなぜ家族なのか、子どもからみたこの大人は一体誰なのかなど、家族をめぐる定義の葛藤が起こります。そして当事者たちの間で「家族」と考える範囲が異なる中で、いわば「闘い」が続くことになります。子どもを育てていくために一応成り立っているはずの連帯やシステムの存在は自明ではなく、システムが成り立つだろうと思って再婚しても、気がつくと崩れていることがあります。そこで、再びシステムを作らねばならないとなっても、社会の中で利用可能なモデルは「初婚の夫婦とその子ども」という家族モデル以外ほとんどありませんから、それに合わせようと思います。すると、大きなストレスが子どもや親にかかってきてしまいます。そのような状況では、よほど柔軟性を発揮しないとなかなか先に進めません。既存のモデルに合わせすぎずに、また家族を外部と明確に境界づけられたものとは考えずに、子育てに関しては元配偶者と連絡をとって時々行き来しあうとか、独自のルールを作るといったやり方もありえるでしょう。日本では、最近までは、どちらかの親が子どもを引き取って、もう一方の親には会わせないという形がほとんどだったと思います。

**石原** はっきりと境界を設けていたわけですね。

**野沢** つまり、初婚核家族モデルの世帯を作り直すわけですね。しかし、アメリカで複核家族(binuclear family)<sup>4)</sup>と呼ばれる状況では、子どもは両方の世帯に多かれ少なかれ分属しているかたちになります。日本ではどうなっていくのでしょうか。この点、家族変動の先端的現象と言えるかもしれません。

## 社会的ネットワークのあり方はアイデンティティにどう影響するのか

**石原** あらためてストレスの話を考えて、ストレスはアイデンティティ・クライシスとして考え

ることが可能な一面があるのではないのでしょうか。家族はその成員にアイデンティティを与える仕組みになっていると思いますが、アイデンティティはおおむね帰属することや所属することで獲得されます。では、社会的ネットワークの場合、そこに帰属していると言えるのでしょうか。アイデンティティは確保されるのでしょうか。ネットワーク論とアイデンティティ論はつながりますか。

**野沢** つながると私は思います。

**石原** 日本はどちらかというと帰属主義の文化的伝統が強いですから、アメリカの分属型家族のイメージになじんで、ネットワークのなかでアイデンティティの確立なり保証が十分になされるのか、そう簡単ではないと思うところがあります。

**野沢** ネットワーク論とステップファミリーの話はちょっと区別しないとイケないかもしれません。アメリカでは、親が離婚しても、子どもが双方の親と関係を維持することは一般的になってきていますが、もちろんそれは子どもにとっても親にとっても簡単なことではありません。でも、受け入れざるを得ないのです。多くの家族は、それを受け入れて自分の人生を前に進めていかざるをえない。子どもの視点からみれば、誰が「本当の」父親あるいは母親なのかというような「問題」に直面する場面が出てきますが、父と母はそれぞれ1人に限られるという考えを棄てて、継親や祖父母を含む3人以上の大人が親的役割を協力して行う子育てシステムを目指すという方策もあります。いずれにしても、親の都合でこれまでの親子の絆を断ち切ってしまうことのほうが子どものアイデンティティ形成にとってよくない、複数の親(的)な役割を担う人々が関わりを続けるのがよい、という見解がアメリカでは比較的一般的になっているようです。

ステップファミリーに限らず、ネットワークとアイデンティティの関係を考えると、緩やかなネットワークがアイデンティティをそのまま支

えることは難しいと思っています。ネットワークの中の連帯した部分や強い絆が個人のアイデンティティを支えるのに重要な役割を果たすだろうと思います。しかし、ネットワークはいろいろな部分によって構成されています。人は、家族のほかには職場など多様な集団に属しています。さらに多様な友人とつきあったり、趣味などの集団に参加したりすることもあります。私たちを包み込む小集団だけでなく、多様な人たちとの相互作用が、「個性」という意味でのアイデンティティの形成を促進する面があると思います。

ステップファミリーのなかで育った子どもの中には、継親を自分の生き方のモデルの1つとしながらアイデンティティを形成する人もいます。その一方で、血縁のある親との関係を心配したり、強い愛着を持ち続けたりすることもできます。また、初婚核家族の場合でも、その中に対立や葛藤が存在するので、つねに連帯し安定したアイデンティティ供給源になっているとは限りません。家族はこうあるべきだという既存のモデルへのこだわりをはずすことで、アイデンティティ・クライシスが乗り越えられることもあるのだと、最近改めて感じています。

※ この対談は、2004年7月27日に行われたものです。

#### 注

- 1) 夫妻のどちらか一方または双方が、以前のパートナーとの間の子どもを連れて再婚した家族、すなわち継親子関係を含む家族。
- 2) 病気などの困難を抱えた当事者や、家族などの関係者が作る団体。悩みを打ちあげたり、困難な状況への対処方法を学んだり、当事者の社会復帰を支援したり、社会的に発言をして政策的改善を働きかけるなどの機能を持つ。
- 3) ステップファミリーのためのサポート団体。
- 4) 子どもを媒介として、元配偶者である両親の2世帯が相互に何らかの連携を保っている家族。米国の家族社会学者、アーロンズ (C. Ahrons) の概念。

#### 文献

石原邦雄編, 2001, 『妻たちの生活ストレスとサポート

関係——家族・仕事・ネットワーク（復刻版）』東京都立大学出版会。

——編，2002，『家族と職業』ミネルヴァ書房。

——編，2004a，『家族のストレスとサポート』放送大学教育振興会。

——編，2004b，『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版。

賀茂美則，2003，『家族革命前夜』集英社インターナショナル。

財団法人家計経済研究所編，2000，『新 現代核家族の風景——家族生活の共同性と個性』大蔵省印刷局。

野沢慎司，2004，「研究の目的と調査データの概要」財

団法人ハイレイフ研究所編『現代家族のライフスタイルとストレス』財団法人ハイレイフ研究所，1-4。

いしはら・くにお 東京都立大学人文学部教授。主な著書に『家族と生活ストレス』（放送大学教育振興会，2000）。家族社会学専攻。  
(ishihara@bcomp.metro-u.ac.jp)

のざわ・しんじ 明治学院大学社会学部教授。主な著書に『増殖するネットワーク』（勁草書房，1995，共著）。家族社会学、社会的ネットワーク論専攻。  
(nozawa@soc.meijigakuin.ac.jp)